

博士学位論文審査要旨

2018年2月8日

論文題目： 明治末期における黄禍論批判——「反人種主義」の逆説——

学位申請者： 李 凱航

審査委員：

主 査：	グローバル・スタディーズ研究科	教授	錢 鷗
副 査：	グローバル・スタディーズ研究科	教授	富山 一郎
副 査：	社会学研究科	教授	沖田 行司

要 旨：

本論文は日清戦後から日露戦争までの間、西洋各国で相次ぎ興起した黄禍論に対して、森鷗外、田口卯吉、高山樗牛を代表とする明治期の知識人がどのように対応し、また、黄禍論、人種論を自らの課題としていかに格闘していたかを考察したものである。

序章では思想史的な視座から黄禍論の先行研究の問題所在を突き詰め、日本における黄禍論への抵抗を、西洋の人種主義受容史のなかに位置付けようとしている。

第一章では近代西欧の人種理論と黄禍論を鋭く批判した数少ない明治知識人である森鷗外の立場や論点に、さまざまな角度から検討を加え、『衛生新篇』第5版の改稿の時に加えられた論文「種族」を考察することによって、これまで見落とされてきた鷗外の人種認識の重層性を浮かび上がらせている。つまり、ドイツを中心とした社会衛生学の思想根底に内包される「人種優劣論」を、鷗外も衛生学の視点において継承し、基本的人種の優劣を前提としていた点に、鷗外の西洋人種差別に対する批判の限界があることを明らかにした。鷗外は黄色人種に属する日本人として、人種間の平等を唱えているにもかかわらず、衛生学の思想的前提に固執したため、黒人への差別を保留することになる。明治思想史における反人種主義の文脈のなかに、人種差別思想が形を変えて含まれていることを発見した意義は大きい。

第二章では文明史家・自由主義経済学者、時事論者として著名な田口卯吉が取り上げられる。先行研究の多くは、彼の人種論における上昇期ブルジョアジーの開明的傾向は、偏狭な民族優越感と無縁なものと評価するか、あるいは、ヨーロッパ人と「同系統」の日本人が、アジアでヨーロッパ諸国と同様な行動をとることの必然性を説く「日本人種アーリア人種起源説」を、脱亜論の延長線に位置付けている。一方、筆者は、田口の日本人種起源論を、彼の異なる時期の議論展開と時代的背景に注目しながら分析し、「人種」における差異化のメカニズムを明らかにした。つまり、人種を差異化しない自由主義経済思想に裏打ちされた初期の内地雑居論、国際政治の情勢を「人種の競争」と捉える後年の傾向、また実証主義史学による日鮮同祖論と海外殖民や対外軍事拡張との絡み合い、さらに日清戦争以降、日本が優位になると、田口は日本政府の「黄禍論」抑制策を無視し、中国東北における権益獲得と表裏をなす「日本人種匈奴起源説」を打ち出し、結局それらはすべて、日本人種優等論の中へと解消されていくことが示される。

田口が具現している複数のコンテクストが絡み合う社会的「知」は、「個人」の意志との相互関係によって初めてその意味が明確となり、また逆にこうした複数性は個人の思想に集結されて示される。しかし黄禍論へのレスポンスのなかに人種論が入ってはいるものの、両者を同等に扱うことはいまだ実現できていない。これは今後の課題であると考えられる。

第三章では、高山樗牛と人種・黄禍論、そしてアジア主義に光が当てられ、日本の黄禍論批判をめぐる言説には、人種主義そのものを批判対象としたのではなく、逆にそれを借用して帝国秩序を構築しようとしたことを明らかにした。筆者によれば、樗牛は明治政府の「北守南進」論と歩調を合わせ、台湾など植民地の異人種を帝国日本に回収するために日本人種南洋起源説を唱え、「同人種同盟論」によるアジア主義へと接近してゆく。だが、樗牛の「人種」と「民族」との議論には必ずしも明確な線引きがあるとは言えないのではないだろうか。また、彼の日清戦争観や「同人種同盟論」によるアジア主義への接近は、単に帝国日本を志向することに止まらないものもあったことが明らかにされている。黄禍論の考察にこの三人を選んだ必然性が十分に提示されていないという問題も残るが、多くの可能性を内在した論文と評価できる。

本論文は、日本近現代史・思想史・植民地主義・人種論と人種差別史の研究など、かなり広範なる領域にわたっているが、各テーマの先行研究を丁寧におさえた労作である。留学生である筆者が、明治期の文献を独力で読み、終始自分の言葉で書こうとする姿勢は大いに評価できる。よって、本論文は、博士（現代アジア研究）（同志社大学）の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2018年2月8日

論文題目： 明治末期における黄禍論批判——「反人種主義」の逆説——

学位申請者： 李 凱航

審査委員：

主 査：	グローバル・スタディーズ研究科	教授	錢 鷗
副 査：	グローバル・スタディーズ研究科	教授	富山 一郎
副 査：	社会学研究科	教授	沖田 行司

要 旨：

学位申請者である李凱航氏に対する総合試験を、2018年1月26日（金）18:30から20:00まで、同志社大学志高館SK116にて実施した。申請者によるプレゼンテーションは約30分、審査委員と申請者による質疑応答は約60分であった。学位申請者は、本論文の問題意識、分析方法、関係する既存研究の到達点、具体的な考察内容、研究の独自性を、丁寧に説明し、審査委員からの質問に対して、的確かつ誠実に答えた。また、本研究の学術的意義と今後の課題についての説明も説得力があった。

本論文の主要な部分は、査読付の学術雑誌で複数発表されており、国内外の学会においても報告され、高い評価を得ている。さらに、本研究に必要な日本語及び英語の能力も、本論文に扱われている明治期の文献、海外で出版された英語文献も的確に解読していることから、十分であることが確認された。また、歴史学、思想史学、政治史などの周辺知識も優れていることが確認できた。よって、審査委員一同は、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： 明治末期における黄禍論批判——「反人種主義」の逆説——

氏名： 李 凱航

要旨：

本研究は、三国干渉から日露戦争までのほぼ十年間に焦点をあてて、当該期の西洋社会において盛んになりつつあった黄禍論に対して、日本人がどのように対応したのかを考察するものである。論文構成としては、序章「明治末期における黄禍論批判：「反人種主義」の逆説」と終章ならびに本論三章、つまり第一章「森鷗外と人種・黄禍論：戦争・文明・衛生学という視点から」、第二章「田口卯吉における人種論の展開：内地雑居論から黄禍論まで」、そして第三章「高山樗牛と人種・黄禍論：大アジア主義への接近」からなっている。

序章においては、まずは黄禍論の研究史に対する整理をする。つぎに、本研究の考察対象を設定した上で、それと関する先行研究を概観しながら、それらの問題点を指摘する一方、本研究の立場と方法論を示す。具体的にいえば、黄禍論への対抗を近代日本における西洋の人種主義受容史という文脈に位置付けることを試みる。

第一章においては、日露戦争直前に『人種哲学梗概』と『黄禍論梗概』の二つの講演を行い、西洋人の人種差別主義と黄禍論に対する厳しい批判的態度をとった文学者・軍医である森鷗外（1862～1922）を取り上げ、鷗外の人種認識を全面的に検討する。まず、日清・日露戦争期間、日本の対外戦争成功と期を一にする黄禍論の同時代文脈をたどり、黄禍論に対する当時のリアクションを「黄色人種同盟」、「文明開化」、「日本人種アーリア人種属」という「三つの対応ルート」に焦点化したことで、鷗外の人種論の座標を定位している。つぎに、義和団時期にあたった講演『北清事変の一面の観察』における鷗外の白人種に対する視線を追いながら、日本の近代化の過程で範とした西洋人種に比肩するようになった黄色人種としての日本人のまなざしと、ヨーロッパ中心主義の象徴とも言える黄禍という時代の見方に対して、鷗外の講演『黄禍論梗概』に提示される一側面と合わせて考察し、鷗外の人種差別主義に対する憤懣を明らかにする。また、鷗外のもう一つ講演である『人種哲学梗概』における人種論批判と「人種主義の父」と呼ばれているゴビノーの『人種不平等論』とを考察し、鷗外が西洋の人種差別を批判したことを踏まえて、新

興帝国である日本に対する鷗外自身の矜持を吟味する。最後に、鷗外の人種論を定位した上で、彼の『衛生新篇』における論文「人種」を取り上げ、前編『人種哲学梗概』の論旨と比較しながら、「衛生学」の視点から彼の人種論を照射する。鷗外は生理学の論拠によりつつ、白色人種と黄色人種をともに「優勝分族」として論じた一方、黒色人種を劣等人種と断定していた。鷗外衛生学の文脈に辿ることで、鷗外の人種優劣観を提示する。

第二章で取り上げたのは、明治期に生涯を送った自由主義論者として、文明史論者として名高かった田口卯吉（1855～1905）である。先行研究は日露戦争期における田口の「日本人種アリア人種起源説」だけに注目し、彼の人種起源論をその学問（言語学・歴史学・経済学）の興味として扱ったが、本稿は田口の全生涯を通して、彼の人種論の展開過程に着目する。視点としては、田口の人種論が置かれた時代の風潮を意識しながら、その学問的基盤をも検討する。まず、若き田口の歴史学として名著である『日本開化小史』の人種意識の希薄の状況を明らかにする。その後、焦点を一八九〇年の田口の南洋行の経験にあてて、南洋に向かった田口の航跡を追いながら、彼の殖民論と南洋論との関わりを検討することで、南洋土人に対する差別意識を明らかにする。この時期にこそ、彼の人種意識が「平等的」関係から「競争的」関係へと転換したことを示す。最後に、日清戦争前後の田口の対清認識を検討することで、田口の大陸領土に対する野心を究明する。また、時代背景としては、同時期に帝国大学の国史科の成立をきっかけに、重野安繹（1827～1910）、久米邦武（1839～1931）と星野恒（1839～1917）などの歴史家を中心とする近代日本の実証史学学派が発足した。その上で、「実証史学」の論拠により、朝鮮半島進出を背景に「日鮮同祖論」は盛んになりつつあった。この時期こそ、田口が文明史論から実証史学へと傾斜し、『史海』雑誌を創刊し、文明史論をあきらめ、人物中心史論を唱えはじめた時期である。それから、田口の日本人種起源論は三つの段階、各時期の政治的状況にそくして言えば、朝鮮半島の拡張を目指す「日鮮同祖論」、中国東北地方領土割譲を提案する「日本人種匈奴起源説」、そして黄禍論という外交圧力下に生じた「日本人種アリア人種起源説」に分けられる。それらを通して、田口の人種論の射程と、大日本帝国膨張の軌道との内在的関係性を明らかにする。

第三章では日清・日露戦争間に活躍した評論家・思想家である高山樗牛（1871～1902）を取り上げ、彼の生涯にわたる人種認識を、それをめぐる同時代の論争と対照しながら論じる。従来の国家主義研究やナショナリズム研究では、樗牛の人種論を日本対外認識の一環として強調されてきたが、本稿が明らかにしたように、樗牛の人種論はまず「国体」をめぐるキリスト教徒との論争のなかに展開した。その国体論争ははじめ、教育、宗教などの領域にとどまっていたが、日清戦争後の台湾領有とそれに伴う日本の国民国家が帝国日本へと移行する状況で、日本帝国の海外

膨張という国是は取り込まれていた。よって、植民地における多くの異人種をどのように帝国日本に回収させるのか、という問題は漸次的に国体論争の核心的問題となっていた。そもそも日本主義を掲げる樗牛は国体観念に生じた権力意識を以て台湾という新領土を支配しようとしたが、明治政府はそれ以上の新領土の獲得を予想しており、樗牛と反対に教育と司法における同化政策を採用した。つまり、国体論は「万世一系」の天皇制の権威として強調されているが、その「単一人種構成論」はほぼ放置されていた。そして三国干渉という厳しい外交難局に、「北守南進」論は再び明治政府の指導部に優位に傾くようになった。そもそも血統の純潔性を強調する「日本人種単一構成論」と海外拡張主義に応じた「日本人種混合構成論」との間で激しく動揺していた樗牛は、政府との歩調を合わせて、「故郷への帰還」という形で日本人種南洋起源説を唱えはじめた。樗牛の記紀研究は日本神話研究史における斬新的な一ページを開いたが、樗牛自身はより深い議論を展開しなかった。それに代わり、樗牛は世界文明史の研究に着手しており、人種闘争を軸として世界史と国際情勢と照らしながら、「同人種同盟論」を唱え、アジア主義へと急速に接近した。

従来明治末期における黄禍論批判については、ヨーロッパと東アジアとの対立を強調し、日本知識人の「反人種主義」の思想的意義として捉えてきたが、本研究は日本人が黄禍論を借用して、東アジア秩序の再構築を行うおうとした点を強調する。その上で、黄禍論の言説空間に、白人種対黄色人種という図式だけではなく、黄色人種間の対立としても示されたという点も論じる。